

未熟児センター内保育に家族が早期に 関与することの親子、家族関係に及ぼす影響

山本 勇志 (福井県立病院)
春木 伸一 (")
荒川 朱実 (")
橋本 幸子 (")
渡辺 嵯恵子 (仁愛女子短大)

福井の県民性の特徴の一つとして、経済的能力に対する評価が、大である点があげられる。婦人の有職率は日本一であり、持家率は全国第3位、家屋の面積も第5位である。一面、労働力になりにくい障害者の受け入れが充分でないという恐れも、ありうる。中には稀ではあるが、障害を持つ子の延命を望まないという声が家族から出て、吾々を驚かせることもある。未熟児、障害児を保育する当未熟児センターのスタッフにとって、退院する子が家庭に暖かく受け入れられるであろうかということは、いつでも心にかかる問題である。退院前の1～2日の保育のtraining だけで母親にひきついで帰す時の不安、その同じ不安に基いたklausのmaternal infant bondingに関する文献は吾々に大きなsuggestionを与えてくれた。53年暮、吾々は、一人の未熟児、1070gで出生し、無呼吸発作を頻発して障害を残す可能性が大きいと思われた女兒の家族に、1週間目より、手洗い、ガウン着用の上、未熟児室に入るように求め、保育器の中の児に触れさせる事を始めた。それ以後の経過と母の反応は、表Iの通りである。未熟児網膜症或は、C.P.のおそれに直面しても、母親と家族が取り乱すことなく、看護チームと一体になって、障害を乗り越える為の、努力に取り組む姿勢が見られた。退院後の家庭への受け入れもスムーズで、その後の取り扱いも極めて好ましいものであった。この経験に力を得て、障害を持つ子及び障害を残す可能性の大きい極少未熟児を対象に、母親及び家族の、早期保育参加をすすめる事にした。「出来るだけ毎日、いつでもよろしいから、訪ねてきて、お子様を見て上げて下さい。」と云うのが、私達が児を受け入れる時、家族に伝える言葉であった。産褥の状態、

家庭の距離、家族の状態によって、接触開始の時期の差、回数のはあつたが、週1回以上児に触れてくれた母親は、次第に増えて来た。母の産褥中は父親に母乳を持参させ、児に触れさせるという方法も行なわれた。それらの結果は概して良好で、家族の受け入れに関する不安が、著しく減少したということは、チームのナースが等しく認める所であり、吾々は、この方法を更に多くの収容児に拡げて行きたいと考えている。しかしながら、「よいようだ」という感触を客観的に確めるために、どうするか、模索していた吾々に、当研究班に参加を、すすめられたことは、ありがたいことであつた。我々は次の様な計画を立て(表II)この試みのメリットとデメリットを評価したいと考えた。

症例の検討

保育に家族の早期導入を行った例は、53年2例、54年18例、55年22例、56年1月末まで2例の計44例である。

接触の状態は、1週間以内には院内出産の母親以外は家族、1週間以後母親が主というパターンで、頻度は週1回～2回、50%、週3回以上50%、接触時間は、始めの頃は、10分前後、退院近くなると長くなり、平均1時間位である。出生時体重、障害の内容については、今回の報告では省略する。

事後追跡調査

50年1月～55年5月の間に、当センターを退院した150人に対して連絡をとり、回答113、未回答26、連絡不能返送11例であつた。

母子関係調査

1) 面接及び訪問

回答のあった症例については、来院を求め当院小児科の心理判定員（1名）が、順次面接を行い、母子関係の調査を行う予定である。多くの例において、その後順調に発育をしていると述べながら、なお何らかの不安を持ち、相談と指導を希望しているので、面接は比較的効率よく行なわれるものと考えられるが、現在福井地方は積雪量多く、止むなく四月以降に計画を立てている。尚来院困難な症例については、女子短大生10人による調査班によって、訪問調査を行う予定である。

2) ペーパーテスト

当初、我々は品川氏の田研式親子関係診断表を利用するつもりであったが、1才～5才の年齢層には、必ずしも適当とは考えられなかった。そこで原点に立ち返り、Symondsのthe psychology of parent-child relationshipの記述に基いて我々の手で、X(acceptance-rejection)、Y(dominant-submission)の2軸の上に、投影する母親の行為を時代の流れに合うように策定しようと試みた。この行為を質問紙法により、多数の母親より解答を求め、現時点の福井の母親にみられる、母子関係を標準化し、これと障害による早期分離を受けた母親グループとの比較、更に分離の中で、早期接触が出来た母親グループとの間に、差があるか、見たいと考えている。この作業は容易なものとは思われないが、母子相互関係は、母親の有職率全国第1位の福井県に於いては、大きな問題である筈であり、福井県全体を通じて、共働きの母親と、在宅の母親との間に、どのような特色があるか、どのような差があるか、など興味ある問題に対して、解明の手がかりを与えてくれる可能性もある。このプラン実現のため、児童心理専門家、保育専門家、現場の保育指導者の意見を求めたところ、表Ⅲの如く広く県下全域に亘る保育関係者の積極的な協力が得られ、標準化のためのfield workに必要な対象人員は、容易に得られる見通しがたった。

我々の計画はSymondsの示したneglect, cruelty, overprotection, indulgenceの4

領域にあることを示す母親のbehaviorを策定する事から始った。10回に余る検討会を経て、

1) 幼児と乳児では座標軸の移動で、補正することの困難なギャップがあり、2段階にわけ、12ヶ月中心と、36ヶ月中心の2種の質問紙を作製する方が効果的である。

2) 各領域 8～12ヶの行為を決め、母親の態度を問うことを決め、2種、80の質問事項を作成した。これを仮印刷して、乳児検診、及び一部の保育園、幼稚園でテストしつつある。今後この資料を検討し、修正を行って、最終的な質問紙を作製して、協力者を通じて広くfield workを行う予定である。協力者は県全体にわたっており、特に私立保育園連盟は、独自の費用と手間をかけて、この調査を引き受けたいと申し出ており、所属92園に於てテストが行えれば、広く福井県全域をカバーする資料となると思われる。

デメリット調査

1. センター内汚染の調査

保育に母親を導入した児を収容する部屋Aと、母親を入れない部屋B、とに分け、2室について

①室内落下細菌

②インクペーター内落下細菌、③水槽内水の細菌、④水道蛇口、⑤児の鼻腔、⑥咽頭、⑦耳孔、について培養を行い(週1～2回)汚染度を比較する計画を立て、12月より実施している。

2. 感染発生の比較

5年間のカルテについて、感染症発生の頻度を、導入開始以前と、以後について、更に導入例数との関連に於て比較する。

3. 導入による汚染防止に役立つ事項の調査

本院に於ては、58年度に未熟児センターを、現在の約1.8倍の規模に、拡張新設する予定であり、56年度に設計に着手する。その新しい構想の中に、家族の導入を容易にし、しかも汚染を防ぐ為の、よりよい設計はどうあるべきか、室の配置、換気方式、保育器、その他の機器等について検討を行っている。

表 I

症例 1 生下時体重 1070g 女児
在胎週数 27週

| 生後日数 | 児の状態 | 母親の態度 | 母親導入計画 |
|------|-------------------|------------------|-------------------|
| 1 週 | 無呼吸発作頻発 | 初めての面会で泣くばかり | 早期面会 |
| 3 週 | | 毎日面会 不安状態続く | 頻回な児との接触 |
| 1 カ月 | 呼吸障害の改善 | 発育に対する不安 | 保育参加 |
| 2 カ月 | 未熟網膜症 光凝固術施行 | 視力に対する心配 育児不安 | |
| 4 カ月 | 体重 2010g コット転床 | 毎日通院 積極的態度 | |
| 6 カ月 | ボイタ法診断 中枢性協調障害 | 家庭保育の不安 | |
| 7 カ月 | 退院 ボイタ法訓練開始 | 退院希望 | 家庭保育への導入 外出・外泊 |

表 II

- I. 未熟児、障害児保育に家族が早期に関与した症例の整理
- II. 当センターを退院したすべての児の予後追跡調査
- III. 面接可能な症例についての母子関係の調査
 - (1) 面接による調査
 - 項目 母の子に対する態度
 - 子の発育の調査
 - (2) ペーパーテストによる調査
 - a) 母の育児態度に関する質問紙の作成 (Symonds の Principle を利用)
 - b) 福井県における一般児の母について調査 —— 標準化

| | |
|-----|-------|
| 1才児 | 800 名 |
| 3才児 | 800 名 |
 - c) センター退院児群、早期保育受入児群それぞれと、標準との比較
- IV. デメリット調査
 - (1) センター内汚染の調査
 - (2) 感染発生の比較
 - (3) 汚染減少に役立つ事項の調査

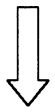
表Ⅲ

| | | | |
|-----|------------|--------|--------|
| 研究者 | 福井県立病院 | 山本 勇志 | |
| | 〃 | 春木 伸一 | |
| | 〃 | 荒川 朱美 | 橋本 幸子 |
| | 仁愛短大保育科 | 渡辺 嗟恵子 | |
| 協力者 | 福井市保育課 | 梶本 美智子 | 融揚 和歌子 |
| | 福井県私立保育園連盟 | 佐々木 勝順 | |
| | 福井市あかつき幼稚園 | 中沢 信順 | |
| | 福井市藤島幼稚園 | 杉山 法継 | |
| | 福井市小鳩幼稚園 | 福沢 搏 | |
| | 敦賀市さみどり幼稚園 | 徳本 道輝 | |
| | 大野市大野幼稚園 | 藤 兼晃 | |
| | 勝山市村岡幼稚園 | 徳田 雅子 | |
| | 美山市上字坂幼稚園 | 島田 曄子 | |
| | 松岡町東保育所 | 谷 富美子 | |
| | 松岡町御陵保育所 | 牧野 和子 | |



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



福井の県民性の特徴の一つとして、経済的能力に対する評価が、大である点があげられる。婦人の有職率は日本一であり、持家率は全国第3位、家屋の面積も第5位である。一面、労働力になりにくい障害者の受け入れが充分でないという恐れもありうる。中には稀ではあるが、障害を持つ子の延命を望まないという声が家族から出て、吾々を驚かせることもある。未熟児、障害児を保育する当未熟児センターのスタッフにとって、退院する子が家庭に暖かく受け入れられるであろうかということは、いつでも心にかかる問題である。退院前の1~2日の保育のtrainingだけで母親にひきついて帰す時の不安、その同じ不安に基いたklausのmaternal infant bondingに関する文献は吾々に大きなsuggestionを与えてくれた。53年暮、吾々は、一人の未熟児、1070gで出生し・無呼吸発作を頻発して障害を残す可能性が大きいと思われた女児の家族に、1週間目より、手洗い、ガウン着用の上、未熟児室に入るように求め、保育器の中の児に触れさせる事を始めた。それ以後の経過と母の反応は、表1の通りである。未熟児網膜症或は、C.Pのおそれに直面しても、母親と家族が取り乱すことなく、看護チームと一体になって、障害を乗り越える為の、努力に取り組む姿勢が見られた。退院後の家庭への受け入れもスムーズで、その後の取り扱いも極めて好ましいものであった。この経験に力を得て、障害を持つ子及び障害を残す可能性の大きい極少未熟児を対象に、母親及び家族の、早期保育参加をすすめる事にした。「出来るだけ毎日、いつでもよろしいから、訪ねてきて、お子様を見て上げて下さい。」と云うのが、私達が児を受け入れる時・家族に伝える言葉であった。産褥の状態、家庭の距離、家族の状態によって、接触開始の時期の差、回数、の多少はあったが、週1回以上児に触れてくれた母親は、次第に増えて来た。母の産褥中は父親に母乳を持参させ、児に触れさせるという方法も行なわれた。それらの結果は概して良好で、家族の受け入れに関する不安が、著しく減少したということは、チームのナースが等しく認める所であり、吾々は、この方法を更に多くの収容児に拡げて行きたいと考えている。しかしながら、「よいようだ」という感触を客観的に確めるために、どうするか、模索していた吾々に、当研究班に参加を、すすめられたことは、ありがたいことであった。我々は次の様な計画を立て(表)この試みのメリットとデメリットを評価したいと考えた。